全学ＦＤ２０１８

他教員・職員・学生が納得する評価の在り方を模索する

報　　告　　書

実施期日：2018 年 10 月 31 日(水)

開催場所：共通教育棟（主会場Ｄ11 教室）

富　山　大　学

教育・学生支援機構教育推進センター

目次

はじめに・・・1

当日プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

参加人数・・・3

基調講演スライド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

基調講演を行って・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

グループ分け一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

グループ討議ワークシート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

全体討議の司会を担当して・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７

参加者感想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８

参加者アンケート用紙・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１

参加者アンケート集計、記述回答・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２

結びに代えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７

はじめに

本書は、２０１８年１０月３１日(水)午後に開催した富山大学全学ＦＤ研修会『全学ＦＤ２０１８』の概要報告書です。

本学では、２０１２年度以降、毎秋「全学ＦＤ研修会」を開催し、今回が７回目にあたります。教育推進センターが企画・実施する全学ＦＤは各部局等で活発に行われているＦＤを補完するものとして各部局とは違う特徴を出すとともに、各センター所属などのため部局のＦＤに参加しにくい教員や日程の都合等で所属部局のＦＤに参加できなかった教員が参加できるようにという意図から、広く全学の構成員に参加を促してきました。

今年度は、２０１５年度以降３年間試行した、普段の授業のミニ版を公開し、その直後に参加学生を交えてグループ討議・全体討議へと進む特有の形態から、以前の形式である基調講演後グループ討議・全体討議にする形式に戻しました。今回も多数の学生や職員も加わって活発な討議が行われ、所属部局のＦＤと両方に参加した教員にとっても、新鮮な感覚があったようで、教育改善活動の促進に繋がると期待されます。

今年度のテーマは「他教員・職員・学生が納得する評価の在り方を模索する」とし、基調講演には創価大学の学士課程教育機構副機構長の関田一彦氏を御招きしました。関田先生には、敢えて講演時間を短めに設定して頂くとともに、グループ討議や全体討議に加わって頂くことができ、有意義な研修会となりました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

２０２０年度からの大学教育の無償化を前に、教育の質保証という点で、成績評価の厳格化をどう進めていくかは大学教育の喫緊の課題であり、中期計画にも厳格な成績評価の確立を盛り込んでいるところですが、それを考える上で、今年度の全学ＦＤは一定の効果があったのではないかと思われます。無論、簡単には結論の出ない難題でもありますので、参加者だけではなく、社会的説明責任という観点から、全構成員が今後もしっかり向き合っていかなければならない課題です。本報告書がそのような点で少しでもお役に立てれば幸甚です。採録してあるグループワークシートやアンケートの自由記述、あるいは参加者からの感想を御覧になると、当日の活発な議論の様子を垣間見ることができるかと思いますので、当日御参加頂けなかった方、あるいは時間の都合で授業参観部分のみに参加された方にも少しでも雰囲気が伝われば幸いです。

最後になりましたが、今回の企画の準備・運営にあたっていただいた全学ＦＤ・教育評価専門会議の委員各位ならびに学務課の職員各位、また積極的に御参加いただいた参加者の皆様にも厚くお礼申し上げます。

富山大学　理事・副学長
教育・学生支援機構　教育推進センター長
神川　康子

他教員・職員・学生が納得する評価の在り方を模索する

全学ＦＤ２０１８

プログラム

１０月３１日（水）　１３：３０～１６：３０
五福キャンパス共通教育棟Ｄ１１教室ほか

全体のコーディネーター　橋本教育推進センター副センター長
基調講演　関田　一彦　氏
創価大学　学士課程教育機構　副機構長

１３：３０～１３：３５　開会の挨拶　神川教育推進センター長
（共通教育棟Ｄ１１）

１３：３５～１３：４５　全体の趣旨説明　橋本教育推進センター副センター長

１３：４５～１４：１５　基調講演　関田先生

１４：１５～１４：２５　小休憩及びグループ討議会場へ移動

１４：２５～１５：１５　グループ討議
（共通教育棟Ｄ２１，Ｂ２１）

１５：１５～１５：３０　小休憩及び全体討議会場へ移動
（共通教育棟Ｄ１１）

１５：３０～１６：１５　全体討議

１６：１５～１６：２０　関田先生によるコメント

１６：２０～１６：２５　閉会の挨拶　橋本教育推進センター副センター長

１６：２５～１６：３５　アンケート記入後、解散

参加人数

		異なり数（非延べ）	右記延べ数	基調講演	グループ討議	全体討議
教員						
役員		1	2	1	0	1
人文学部		1	1	1	0	0
人間発達科学部		0	0	0	0	0
経済学部		4	8	4	2	2
芸術文化学部		1	1	1	0	0
教養教育院		11	23	11	6	6
教職実践開発研究科		2	4	2	1	1
医学薬学研究部（医学）		3	7	3	2	2
医学薬学研究部（薬学）		1	1	1	0	0
理工学研究部（理学）		0	0	0	0	0
理工学研究部（工学）		2	4	2	1	1
理工学研究部（都市デザイン学）		8	20	8	6	6
センター等		9	17	9	4	4
他大学等教員		2	6	2	2	2
小計		45	94	45	24	25
職員						
人社系事務部 人社系学務課	人文学部	0	0	0	0	0
	人間発達科学部	1	1	1	0	0
	経済学部	2	2	2	0	0
理工系事務部 理工系学務課	理学部	1	1	1	0	0
	工学部	2	2	2	0	0
	都市デザイン学部	2	2	2	0	0
医薬系事務部医薬系学務課		5	11	5	3	3
芸術文化学部総務課		2	2	2	0	0
学務部		14	23	14	3	6
学内その他		2	4	2	1	1
他大学等職員		2	4	2	2	0
小計		33	52	33	9	10
学生						
人文学部		1	3	1	1	1
人間発達科学部		1	3	1	1	1
経済学部		1	3	1	1	1
理学部		2	6	2	2	2
工学部		3	9	3	3	3
都市デザイン学部		3	9	3	3	3
医学部		0	0	0	0	0
薬学部		0	0	0	0	0
芸術文化学部		3	9	3	3	3
その他		1	1	1	0	0
小計		15	43	15	14	14
合計		93	189	93	47	49

富山大学全学FD2018

「厳格な成績評価」との付き合い方

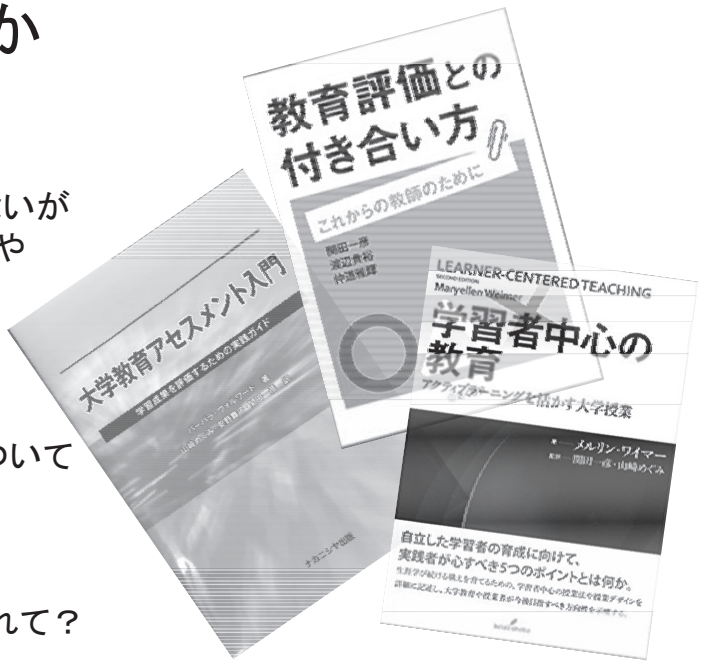
創価大学学士課程教育機構・教職大学院
教授 関田一彦

なぜ私が呼ばれたのか

「教育評価」の専門家、というわけではないが
自学のFD担当者として関連書籍の翻訳や
教職教養としての「教育評価」を講義
してはいる。

自学のカリキュラムや自己点検評価について
多少、アドバイスする立場にいる。

実践的な視点からの話題提供を期待されて？



成績評価にまつわる疑問（自学の経験から）

努力点（平常点）は成績に反映すべき？

授業中に行う小テストやクイズと定期試験、どっちが大事ですか？
「毎回授業に出ているから、単位ください」という学生はいませんか？

シラバスに記載された到達目標を達成した学生の成績は？

履修者全員が到達目標をクリアしたら、全員にAをつけるのは妥当？

単位が取りやすいとか、成績に甘いとか、あるいは反対に難し過ぎるとか、
不合格がかなり多いとか、担当教員によって差があるのは当然のこと？

成績の厳格化、　誰のために、何のために？

90点以上A＋、89~80点A、79～70点B、・・・
80点と79点、75点と74点
点差は同じ1点だけど、、、

妥当な評価と厳格な評価

評価する側、される側、そして結果を使う側が納得する評価基準を用いること

評価の方法や基準の明示

設定された評価基準を杓子定規に適用すること

成績評価＜教育評価

教育における評価は、学習者の学習促進（→成長）のための行為

成績評価（grading）は格付け作業？

ミカンの等級

秀…色沢、形状、食味がどれも秀れており、外傷などがほとんどないもの
優・良…色沢、形状、食味がどれも良好で、外傷などの被害が少ないもの
並…形状は整っており、外傷などの被害程度が極端ではないことで商品価値を損なっていないもの

選抜のための評価（評定）

労働市場に向けた品質保証？
（国際通用性）

成績評価の厳格化

業者テストなど外的指標を使った
学習成果の可視化促進

教育のための評価

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性等の涵養

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

生きて働く**知識・技能**の習得

【基調講演を行って】

「『厳格な成績評価』との付き合い方」と題して 30 分ほどの話題提供をさせていただいた。成績を厳格につけるための原則は説明できても、実際にどうするかはその組織と構成員の考え方に左右されるので、正解のないテーマともいえよう。学習の評価から学習のための評価へ、さらには学習としての評価へと教育における評価の役割が広がる中で、誰のための、何のための厳格化なのか、参加された方々に考えてもらうきっかけづくりになったのなら幸いである。

話題提供を意識して、少し雑駁になりすぎたかもしれない。私の話を受けて行われたグループ討議では（確か 8 グループ編成だったと思うが）、現役の学生も参加して、評価する側とされる側が語り合う機会になったグループもあり、かなり多様な論点があったようである。

私は評価する側もされる側も納得できる評価が大切だと考えている。評価の当事者たちの納得がないところに厳格化を求めても生産的ではないと考えている。その意味で、学生が参加しての FD セミナーは、このテーマを扱う上でとても理に適っていると感じた。富山大学では成績評価の厳格化に向けて改革を進めているところと伺った。このセミナーが、そうした改革の努力を意味あるものにする一助になればと願っている。

（創価大学学士課程教育機構副機構長　関田一彦）

グループ分け一覧

当日は、多くの刺激を受けられるよう学生と教職員が混在するグループ構成としました。

●印は各グループのファシリテーターで、進行マニュアルを渡して協力をお願いしました。

各グループとも活発な討議を楽しめたようです。

Ａ（Ｄ２１教室）

経済	准教授
●工学	教授
都市	助教
人文	１年
経済	４年
総務	職員
学務	職員

Ｂ（Ｄ２１教室）

医学	助教
都市	准教授
●教養	教授
人発	２年
理学	１年
医薬	職員

Ｃ（Ｄ２１教室）

医学	助教
都市	准教授
●教養	教授
学外	教授
経済	３年
工学	１年
学外	部長
学務	課長

Ｄ（Ｄ２１教室）

●経済	教授
都市	准教授
教養	准教授
工学	１年
芸文	１年
就職	課長

Ｅ（Ｂ２１教室）

都市	教授
●教養	准教授
環境	准教授
推セ	教授
芸文	１年
都市	１年
学外	次長
学外	教諭

Ｆ（Ｂ２１教室）

人発	教授
都市	助教
●教養	准教授
水素	教授
工学	２年
都市	１年
医薬	職員

Ｇ（Ｂ２１教室）

都市	准教授
●教養	教授
アイ	准教授
学外	教授
芸文	１年
都市	１年
医薬	職員

人発：人間発達科学部　　推セ：教育推進センター

アイ：研究推進総合支援センターアイソトープ実験施設

（参考）グループ討議参加者数

教員　２６名

職員　　９名

学生　１４名

計　　４９名

全学ＦＤ2018 グループ討議ワークシート

グループ記号 A

グループとしての討議テーマ

よく相談の上、書記役が簡潔に記して下さい。

学生目線で見た成績評価.

グループとしての主張等

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。コピーを受け取る他のグループにも分かりやすいよう、サインペン等を使うことを推奨します。カラーペンを使うことは差し支えありませんが、コピー及び報告書資料として採録する場合は白黒印刷になることを了承して下さい。

※グループメンバーの主張を融合する形でも誰かの主張をブラッシュアップする方向でも構いません。図式的なものでもＯＫです。

学生の立場から.

* テストの返却がない.
* 語評で判断するしかない.
* どこまで達成できたか あやふや.
* 1発勝負にギ問.（場合により一夜づけの知識でも通る）
* テストの結果を振り返りたい.
* 全員良い成績だと納得いかない.

○科目によって成績の分布があって当然.（実験や実習）

○

○多面的な評価が必要.

○学生の実力が最終的に評価されるべき.

○社会雇用するレベルを目標として評価する.

※ワークシートはグループ討議終了後速やかにＤ１１教室前で待機中の担当者に提出して下さい。

全体討議で参加者全員にコピーを渡して共有する予定です。

全体討議では、単に自グループの意見発表をするだけではなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。特に、自分たちの主張を発表する時には、誰が中心になって発表するかということも予め決めておくことが望ましいです。

全学ＦＤ2018 グループ討議ワークシート

グループ記号 B

グループとしての討議テーマ

よく相談の上、書記役が簡潔に記して下さい。

適当な評価とは.

グループとしての主張等

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。コピーを受け取る他のグループにも分かりやすいよう、サインペン等を使うことを推奨します。カラーペンを使うことは差し支えありませんが、コピー及び報告書資料として採録する場合は白黒印刷になることを了承して下さい。

※グループメンバーの主張を融合する形でも誰かの主張をブラッシュアップする方向でも構いません。図式的なものでもＯＫです。

1) レポート評価
問題：基準や書き方が分からない.
→ ルーブリックや例を提示して欲しい.

2) グループ学習評価.
問題：発言したがりの子の評価が高くなる.
→ 先生が役割りも決める. ピア評価

3) 一発評価
問題：59点と60点問題.
多面評価、レポート評価.

※ワークシートはグループ討議終了後速やかにＤ１１教室前で待機中の担当者に提出して下さい。

全体討議で参加者全員にコピーを渡して共有する予定です。

全体討議では、単に自グループの意見発表をするだけではなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。特に、自分たちの主張を発表する時には、誰が中心になって発表するかということも予め決めておくことが望ましいです。

全学ＦＤ2018 グループ討議ワークシート

グループ記号 C

グループとしての討議テーマ

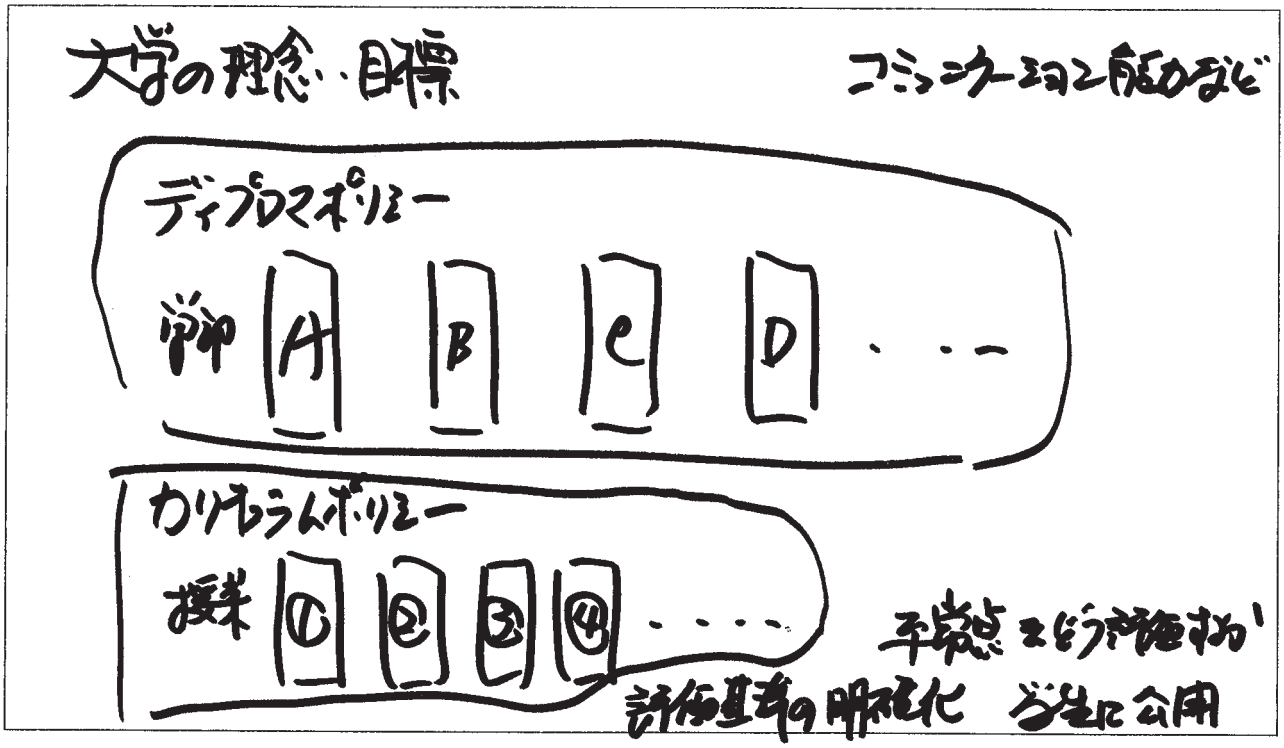
よく相談の上、書記役が簡潔に記して下さい。

学士課程の評価の厳格化

グループとしての主張等

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。コピーを受け取る他のグループにも分かりやすいよう、サインペン等を使うことを推奨します。カラーペンを使うことは差し支えありませんが、コピー及び報告書資料として採録する場合は白黒印刷になることを了承して下さい。

※グループメンバーの主張を融合する形でも誰かの主張をブラッシュアップする方向でも構いません。図式的なものでもＯＫです。



※ワークシートはグループ討議終了後速やかにＤ１１教室前で待機中の担当者に提出して下さい。

全体討議で参加者全員にコピーを渡して共有する予定です。

全体討議では、単に自グループの意見発表をするだけではなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。特に、自分たちの主張を発表する時には、誰が中心になって発表するかということも予め決めておくことが望ましいです。

全学ＦＤ2018 グループ討議ワークシート

グループ記号 D

グループとしての討議テーマ

よく相談の上、書記役が簡潔に記して下さい。

成績の評価方法の明確化と成績の活用について

グループとしての主張等

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。コピーを受け取る他のグループにも分かりやすいよう、サインペン等を使うことを推奨します。カラーペンを使うことは差し支えありませんが、コピー及び報告書資料として採録する場合は白黒印刷になることを了承して下さい。

※グループメンバーの主張を融合する形でも誰かの主張をブラッシュアップする方向でも構いません。図式的なものでもＯＫです。

・レポートの評価方法
・再試験の評価 ）…不公平感がある（学生）

前提 …皆が納得できるようにすること！

学生 － 教員（評価者 － 活用先
（コース配属，授業料免除，採用活動など）

※ワークシートはグループ討議終了後速やかにＤ１１教室前で待機中の担当者に提出して下さい。

全体討議で参加者全員にコピーを渡して共有する予定です。

全体討議では、単に自グループの意見発表をするだけではなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。特に、自分たちの主張を発表する時には、誰が中心になって発表するかということも予め決めておくことが望ましいです。

全学ＦＤ2018 グループ討議ワークシート

グループ記号 E

グループとしての討議テーマ

よく相談の上、書記役が簡潔に記して下さい。

厳格な成績評価は必要なのか？

グループとしての主張等

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。コピーを受け取る他のグループにも分かりやすいよう、サインペン等を使うことを推奨します。カラーペンを使うことは差し支えありませんが、コピー及び報告書資料として採録する場合は白黒印刷になることを了承して下さい。

※グループメンバーの主張を融合する形でも誰かの主張をブラッシュアップする方向でも構いません。図式的なものでもＯＫです。

・学生が成績評価で受ける実感と成績の評価で印象が異なっている。

・評価を厳格にするためと評価を統一するよりも，平常点を重視するものと期末試験のみのものなどがいろいろ混じっている方が良い。

・小，中，高と総合的な成績評価に重点が置かれる中で，どこまで大学の成績評価の厳密化が必要なのか？

・学生の立場でも成績の評価の仕方がわかった方がいい。

※ワークシートはグループ討議終了後速やかにＤ１１教室前で待機中の担当者に提出して下さい。

全体討議で参加者全員にコピーを渡して共有する予定です。

全体討議では、単に自グループの意見発表をするだけではなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。特に、自分たちの主張を発表する時には、誰が中心になって発表するかということも予め決めておくことが望ましいです。

全学ＦＤ2018 グループ討議ワークシート

グループ記号 F

グループとしての討議テーマ

よく相談の上、書記役が簡潔に記して下さい。

学生と教員がともに納得できる評価基準

グループとしての主張等

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。コピーを受け取る他のグループにも分かりやすいよう、サインペン等を使うことを推奨します。カラーペンを使うことは差し支えありませんが、コピー及び報告書資料として採録する場合は白黒印刷になることを了承して下さい。

※グループメンバーの主張を融合する形でも誰かの主張をブラッシュアップする方向でも構いません。図式的なものでもＯＫです。

・学生に納得のいく基準を説明してほしい
　科目・分野ごとの特性
　　興味をもってくれればよい科目
　　就職・資格取得に必要
　→ 科目ごとの目標を提示する

・同じ科目名の科目でその基準の統一してほしい

※ワークシートはグループ討議終了後速やかにＤ１１教室前で待機中の担当者に提出して下さい。

全体討議で参加者全員にコピーを渡して共有する予定です。

全体討議では、単に自グループの意見発表をするだけではなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。特に、自分たちの主張を発表する時には、誰が中心になって発表するかということも予め決めておくことが望ましいです。

全学ＦＤ2018 グループ討議ワークシート

グループ記号 G

グループとしての討議テーマ

よく相談の上、書記役が簡潔に記して下さい。

絶対評価か相対評価か

グループとしての主張等

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。コピーを受け取る他のグループにも分かりやすいよう、サインペン等を使うことを推奨します。カラーペンを使うことは差し支えありませんが、コピー及び報告書資料として採録する場合は白黒印刷になることを了承して下さい。

※グループメンバーの主張を融合する形でも誰かの主張をブラッシュアップする方向でも構いません。図式的なものでもＯＫです。

原則として絶対評価

・評価基準、到達目標の明確化→情報公開

・教員の説明責任がしっかりできるようにする

・授業内容を工夫する（教育プロセス）

※ワークシートはグループ討議終了後速やかにＤ１１教室前で待機中の担当者に提出して下さい。

全体討議で参加者全員にコピーを渡して共有する予定です。

全体討議では、単に自グループの意見発表をするだけではなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。特に、自分たちの主張を発表する時には、誰が中心になって発表するかということも予め決めておくことが望ましいです。

↑Ａグループ討議

↑Ｂグループ討議

↑Ｃグループ討議

↑Ｄグループ討議

↑Ｅグループ討議

↑Ｆグループ討議

↑Ｇグループ討議

【全体討議の司会を担当して】

全体討議の司会は、今年度も教育推進センターの橋本が担当しました。

過去３年間と同様、各グループは教職員・学生が混じるように編成し、各グループには教員の参加者の中から予めファシリテーター役をお願いしました。ファシリテーター役は初めてという方もおられましたが、全体にスムーズに進行したようです。

今年度は、他大学等にも公開した結果、少数ですが学外者もグループ討議に加わる要素も重なって、短時間でいかに打ち解けられるか、また、本音で活発に話し合えるかという点は例年以上に難しさを伴いましたが、その点を考慮して、例年よりわずかながらグループ討議時間を長く設定するなどした結果、多くのグループでは活発な討議がなされたようで、予定の時間を越えたところも少なくありませんでした。それを受けた全体討議でも、活発な発言がなされました。本報告書に採録してあるグループワークシートからも、各グループで、積極的な意見交流がなされた様子がうかがえるのではないでしょうか。

全体討議は、今年度も、そのワークシートを全員にコピー配布するというやり方で共有しながら、グループを越えた全体での意見交換をする形を取りましたが、今年も、教員だけではなく、学生や職員から鋭い発言があり、中身の濃い時間が持てたと思います。

基調講演をして下さった関田先生も、グループ討議に加わって頂き、全体討議では踏み込んだ自論も展開して下さいましたし、全員にコピー配布するとなると時間的にやや手間取るため、その間を繋ぐための、私との雑談的やり取りにも気軽に応じて下さったことも大変ありがたく思いました。

コピー担当の職員の方に御負担をおかけする共有形式は問題もありますが、一般的な、各グループが討議結果を順次発表する形式に比べて、共有感覚が強く、参加者一人一人の手元に具体的な資料が残るという利点もあります。各グループでの討議内容を共有することは、こうしたＦＤ形式では必要不可欠のことであり、参加者全員がより主体的に参加しやすい形にすることは非常に重要です。次年度はどんな形式とするかについては、継続課題としてさらに検討する予定です。

（教育推進センター教授　橋本　勝）

【参加者感想】

今回のテーマは、富山大学が全学をあげて取り組んでいる成績評価の厳格化に関係しています。基調講演を行った関田先生は教育学の専門家であり、成績評価にまつわる問題点をわかりやすく解説されました。グループ討議では参加した学生とある程度本音で語り合うことができました。このテーマには、多くの教員が関心を寄せていると思っていたのですが、教員の参加者は意外に少なく、特に人文学部、理学部からの参加者がないことが残念でした。一部の教員には、成績評価のやり方は教員の裁量なので、これに介入することは越権行為である、という意見があります。また、どんな教育を行うかは、大学教員に認められた「教育の自由」として憲法に保障されている、という考えがあります。しかし、関田先生の基調講演では、成績評価の厳格化は、「誰のために、何のために」、という問いかけをすると、答えが明瞭になることが示されました。成績評価や大学の授業は、それを受け取る学生のためであり、また、社会に出て活躍できる人材を育てることは、少子高齢化を迎え、減衰期に入っている日本の社会全体が大学に寄せる要望であり希望です。こういうことを無視して、教育は大学教員に与えられた特権事項のように考えているのは、時代錯誤ということになります。私たち教員は、学生の声に耳を傾け、その背後にある学生の家族や社会の期待に添うように努力する義務があると、強く感じた次第です。

（教養教育院教授　谷井　一郎）

私がファシリテーターを担当したグループではまず基調講演を受けた感想を述べてもらうところから話を始めました。討論全体を通して、教員メンバーも学生メンバーも話を向けるとためらうことなく意見を述べてくださり、終始和やかな雰囲気で意見交換ができました。教員は４人で、文理の両分野の方が含まれ、また今年度から教員となられた方もおられて幅広い視点からの意見を伺うことができました。学生にも積極的にそれぞれの経験を踏まえた意見を発言してもらえたので、ファシリテーターとしてとても助かりました。

最終的に、議論は「授業に関わる教員と学生が互いに納得のいく判断基準をつくることと、それを学生に十分に説明することが必要」ということと、「同一科目名で教員が異なる授業科目での基準の統一が必要」という点に集約することができました。

反省点としては、議論の冒頭で「なんのために厳格化が必要か」の説明を怠ったため、「そもそもこのような厳格化には反対」といった「そもそもの是非」を問う意見が出てしまったことが挙げられます。幸い、グループメンバーの職員の方がその目的を説明してくださったので、議論の方向を収束させることができましたが、ファシリテーターとしてはこの点は気をつけるべきだったと感じました。最後に、このような役割の経験は初めてでしたが、メンバーの方々のご協力で円滑に議論を進めることができました。この場を借りてお礼申し上げます。

（教養教育院准教授　杉森　保）

まず、基調講演に関する率直な感想から述べさせてもらうことにする。
僅かに３０分間という短い持ち時間であるにも拘わらず、アクティブラーニングを演者が意識されたのであろうか、学生との対話などを講演に取り入れられたため、最後は単なるスライドを読み上げるだけになってしまったように感じた。やはりアクティブラーニングというのは、答のない問題について時間を掛けて論ずる場合には有効であるが、すでに答の決まっている問題を論ずる場合や、あるいは時間が限られている場合には、却って学習効果を損なう。よって、昨今の「何でもかんでもアクティブラーニングをすればよい」という風潮は誤りである、という持論を皮肉にも再確認する場となった。

次に、グループ討議についての感想を述べる。

私がファシリテーターを務めたグループでは、絶対評価と相対評価のどちらが「他教員・職員・学生が納得する評価」となるかという問題について議論を行った。メンバーのほぼ全員が、絶対評価が相応しいという回答であったため、「どうすれば厳格な絶対評価ができるのか？」という問題について議論を続けた。グループとしての結論は、以下のようにまとまった。

- 絶対評価を行う際には、到達目標を「何をする／できる」だけではなく、「何を『どこまで』する／できる」というレベルまで示しておく必要がある。それはなかなか難しいことではあるが、例えば、過去問をすべて公開し、どの程度のレベルの問題を解けることを要求しているのかを明らかにしておくなどの方策が考えられる。
- 評価結果については、教員が説明責任を果たせるようにしておく必要がある。
- 絶対評価の結果「特に秀が多い／特に不可が多い」という状況に至ってしまった場合には、次回から到達目標を下げる／上げるなどの調整を行って、ある程度のバランスがとれるようにする必要がある。

以下は私的意見である。このように適度な調整を加えることは必要であるが、『不可が多い→到達目標を下げる→不可が減る→学生が（ナメてかかって）もっと勉強しなくなる→また不可が増える→・・・』という「負のスパイラル」に陥る可能性が高く、単純に「秀優良可不可の比率」のみを指標とすることは誤りであろう。やはり、どこかで歯止めをかける必要があると思われる。

（教養教育院教授　笹野　一洋）

全学 FD2018 では、最初に関田先生の基調講演を聴くことができ、大学の成績評価の在り方について詳しく理解することができました。

私が参加したグループでは、「学生目線の成績評価」というテーマで話し合いました。学生や教職員がいろいろな意見を出し合い、さまざまな角度から大学の成績評価について話し合うことができました。

また、最後の全体での話し合いでは、それぞれのグループの意見に対して、関田先生が丁寧に詳しくコメントをしてくださり、大学の成績評価についてさらに理解が深まりました。他のグループの話し合った内容もよく分かり、大変有意義な全学 FD になったと感じました。

私は、富山大学の UD　Mates の OG で、学生の立場としてこれまでにたくさんの FD に参加させていただきました。しかし、今回は初めて職員の立場として参加させていただき、他の教職員や学生の意見を聞きながら、職員の視点から「大学の成績評価」について深く考えることができ、貴重な経験ができました。

（危機管理室職員　東海　麻由）

全学ＦＤ２０１８　参加者アンケート

本日は、全学ＦＤ２０１８に御参加いただき、ありがとうございました。今後の企画の参考にさせていただくため、アンケートに御協力をお願いします。(当てはまる番号に〇を付けてください。)

問１　今回の企画の各パート及び全体について評価をしてください。

	良くなかった	あまり良くなかった	どちらともいえない	おおむね良かった	良かった
１）基調講演	1	2	3	4	5
２）グループ討議	1	2	3	4	5
３）全体討議	1	2	3	4	5
４）企画全体として	1	2	3	4	5

問２　全学ＦＤでは、討議型ＦＤを取り入れ、グループ討議及び全体討議を実施していますが、どのように思いますか。

１）このままでよい　２）変えたほうがよい　３）その他（　　）

この回答について、理由・意見があれば記入してください。

問３　開催時期について、どう思いますか。

１）今のままでよい　２）変えたほうがよい（時期：　　）

問４　今後、より多くの教員・職員・学生に全学ＦＤ研修に参加していただくために、良い考えがあれば記入してください。

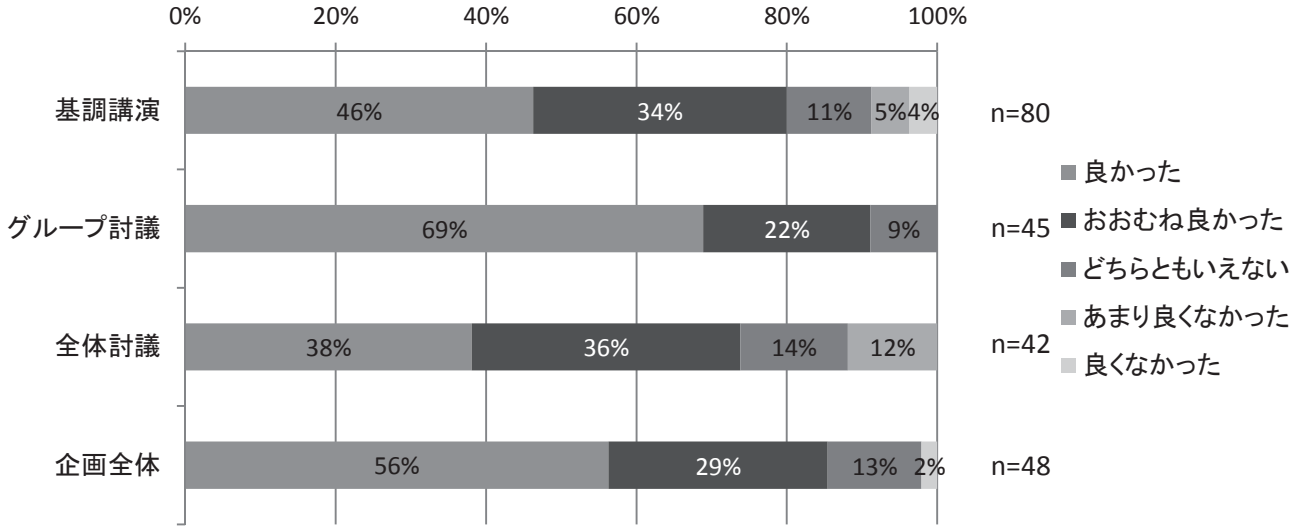
問５　今後の全学ＦＤ研修で、実施して欲しいテーマがあれば記入してください。

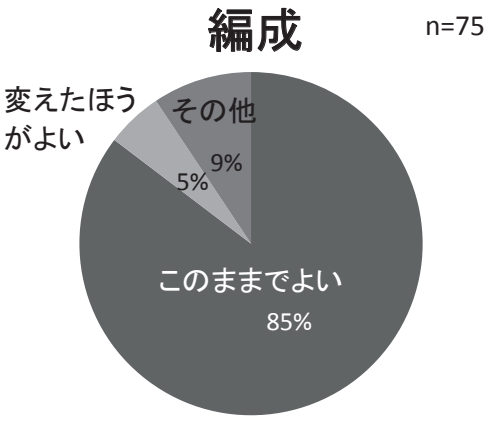
御協力ありがとうございました。最後にあなたの立場と御所属をお教えください。

１）教員　２）職員　３）学生

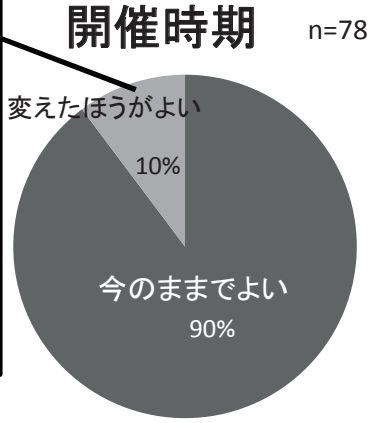
１）人文　２）人間発達　３）経済　４）理　５）工　６）医　７）薬　８）芸術文化
９）都デ　10）その他（　　）

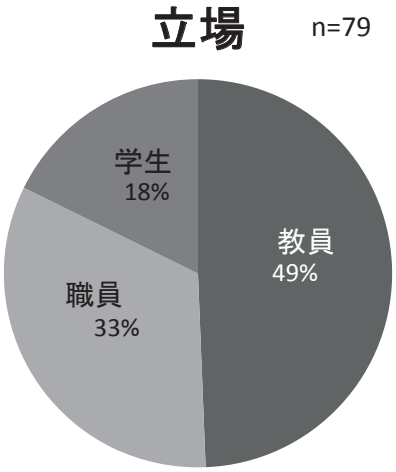
全学FD2018　参加者アンケート集計

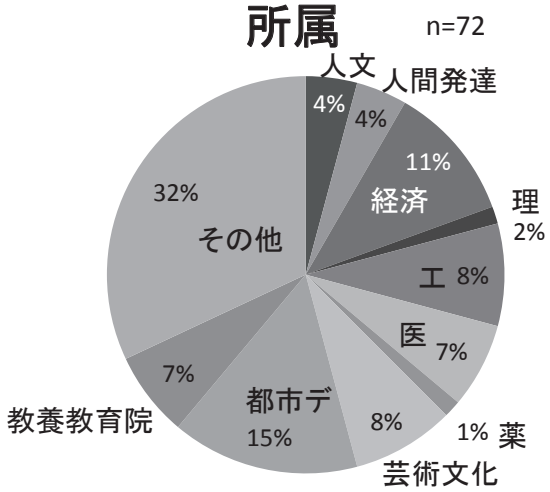




代わりの時期
- 夏季休業期間中等
- 土日
- 科研費の時期以外
- 6月下旬～7月上旬
- 複数回開催すべき







全学ＦＤ２０１８　参加者アンケート記述回答

◎問２（２）「（１）『全学ＦＤでは、討議型ＦＤを取り入れ、グループ討議及び全体討議を実施していますが、どのように思いますか。』の回答について、理由・意見があれば記入してください。」の回答

○（１）で「１）このままでよい」と回答した人の回答

―肯定的な意見―

・今回は人数も適切（時間との兼ねあい）だったので。
・多様な意見が聞ける。
・一般的な流れだと思う。
・順々に参加していくことで、テーマへの理解が深まった。
・今回参加して、教員にも学生にも関わる「成績評価」について意見交換できたことで、様々な立場の人の考えを知ることができました。双方が関わる話題を双方で話し合うことはとても良い理解の場だと思えたので、こういった話し合いが増えればとても良いと思いました。また機会があれば参加したいです。ありがとうございました。
・学生参加のＦＤはとても良いです。本音を述べ合うことができた。
・多様な意見を聞ける良い機会になっている。
・自分の意見が言える。何を言ってもよい雰囲気がある。
・学生の意見を否定するのではなく、しっかり受けとめてくれた。こういう人がいたグループだったので良かったですが、他グループは全てがそういう訳ではなさそうだった。もし自分が他グループだったら、今回ほど自分の意見は言わなかっただろうと思う。
・グループ討議で、先生方と割とたくさん話せました。
・他学部の先生方、学生との混成チームでの討議は違った分野・立場からの様々な事情・意見を聞けて非常に参考になった。

―建設的な意見―

・このままでよいが、もう少し講演と講演者の質疑応答の時間があっても良いと感じました。（最後までいられなかったので、不適切な感想かもしれませんが…。）
・成績厳格化をしていかなければいけない、より具体的な背景、現状をもっと知りたかった。
・「話題提供」としての講演の位置づけなのですが、講演の段階でも、講師の方のお考えや、回答、対策などをもっと教えて頂きたかった。
・議題に対して考える端緒になるが、実のあるものにするには、これだけではなかなか難しいのでは？
・グループ討議の時間がもう少しほしい。
・討議型は良かったと思うのですが、時間が短かったように感じました。

○（1）で「2）変えたほうがよい」と回答した人の回答

・ＦＤに学生を交えるのも良いと思うが、講演内容はもう少し教職員向けにしてほしい。特に 30 分と短いのでもう少し専門的に突っ込んだ話を聞きたい。最後の５分のおはなしをもっと聞きたかったです。

・全体討議の時間が短い、講演者へ質問できない。

○（1）で「3）その他」と回答した人の回答

・学生を参加させる必要はない。（(1)「3）その他」での括弧書き：回答なし）

・グループ討議を含めると時間がかかる。（(1)「3）その他」での括弧書き：（全体討議）質疑応答の時間をもうければ、グループ討議はなくても）

・事前に討議テーマを周知してほしかった。（(1)「3）その他」での括弧書き：本学の現状の資料があったらすすめやすかった。）

・全学ＦＤは、学生・大学職員が合同であることは大変よい！！このような機会は大変少ないのでもっと時間をとってほしい！（(1)「3）その他」での括弧書き：このままで良いが討議時間が短すぎる。）

・全体討議時間を延ばしてほしい（(1)「3）その他」での括弧書き：回答なし）

・全体討議での意見がいろいろな観点から話されたが、結論はよくわからなかった。それをまとめることが、必要なのかどうかも気になった。（(1)「3）その他」での括弧書き：変えたほうが良いのかどうか分からない。）

◎問４「今後、より多くの教員・職員・学生に全学ＦＤ研修に参加していただくために、良い考えがあれば記入してください。」の回答

―周知方法について―

・開催日をもっと早めに決定し、本学ＨＰのトップページ等で内外に周知する。

・学部の授業で、もっとＦＤを宣伝してもらう。

・周知手段の多様化をすすめる。

・早くよりアナウンス、広くアナウンス。

・学生の場合、授業に出ないと知らないと思うため、大々的に告知したほうが良いと思った。

・全学ＦＤを知らない学生が多い（私も授業での紹介なしでは知らなかった）ので、多くの授業で紹介をしてほしい。

・ＦＤ参加が義務ととらえてしまうが、もっとアナウンスを強化すれば参加するようになるのでは。（メール等）

・ＳＮＳを活用する。

・周知に尽力する。

・授業教室前に掲示する。

・各学科の教授にこの案内を伝え、各学科の学生に知ってもらうようにする。

―参加者の募集方法について―

・ＳＤのとりくみとして職員の参加を義務化する。
・自由参加（人数制限を無くす）　※学生からの意見
・各学部で、参加教員を指名する。
・もっと参加者数の上限を上げてほしい。　※学生からの意見
・強制的でもいいので一度参加することを求めるとよいかもしれません。一度参加すると想像以上に面白いものだと思います。
・自発的な参加より、各学部に少数で良いですから、参加を要請（強請）した方が良いように思います。すると多くの意見がみられると思います。
・学科ごとに人数指定して要請することも必要かと（思います）。
・今回、人文学部、理学部の教員の参加がなかった。各学部から最低 2 人ぐらいは、出席を強いることにできないでしょうか。
・本学のインターンシップに参加した学生にも、全学 FD に参加してもらう。

―開催形式について―

・ＳＤとして開催する。
・時間は短い方が参加しやすい。
・ほかの行事と重ねない。
・17：00 以降飲み会を開催する。多様性こそ大切！！
・生協等で飲みもの・軽食を交えながら気軽なふんいきを（出す）。
・時間短縮

―開催内容について―

・一堂に会するのは無理なので、テーマに合わせて対象となる教職員を絞ってみてはどうでしょうか。
・例えば、年度末に関心事について、学生にもアンケートを取り（学生には学生アンケート時に。）、皆の関心が高い内容をテーマとするなどどうでしょうか。（アンケート内容の集計が大変ですが…）（今回のテーマは、タイムリーであり、良いテーマと思います。）
・著名な専門家の講演
・本気で討論できるというのが良いので、それを押す。
・出席者には何か具体的なメリットを。
・有名な方を講師として招く。（テレビに出ているような、どこかの私大の特別講師、専門家など。）
・基調講演は録画して後日閲覧できるようにする。学内限定で。
・最後のコピー（ワークシートか）は、PC 台を配付して、Word か Excel で記載してもらい、USB でディスプレイ（スクリーン）に表示する。
・これまでの内容について紹介した方がよい。

◎問５「今後の全学ＦＤ研修で、実施して欲しいテーマがあれば記入してください。」の回答

・授業評価アンケートの効果的な実施方法とその活用方法について
・教養教育と専門教育の在り方
・例えば、教養教育一元化に伴い、３キャンパスの学生・教員間の交流を深めていくには、どのような講義、教育活動を行っていくべきか。
・大教室の授業でのアクティブラーニングの実践例について
・ルーブリック
・アクティブラーニング
・キャリア教育
・具体的なテクニック的なもの。ワークショップ的なもの。
（例）ルーブリックを作り使う。学生に話させる話し方講座等
・学生アンケートに関すること
・高大接続
・人生 100 年対策―生き抜く力の育て方
・Active Learning の基本
・今回と同じ「教員・学生・職員が納得する評価の有り方ソノ２…」をお願いしたい。
→ルーブリックのメリット・デメリットを含めて！
・「授業」の枠にとらわれず、大学の存在意義（背景：少子化）、学生生活（背景：問題のある学生が多いこと）など。
・Moodle 活用
・授業や生活の中で最低限あってほしい大学生の姿を、教員や学生、様々な立場の人たちで意見を交換してほしい。⇒学生への理解を広めて有意義な生活を送りたい。
・学生と本音で語り合えるテーマなら、なんでも。
・理系におけるアクティブラーニング
・教育と対話
・クォーター制の導入について
・学生の意見として、「こういうものを学びたい」という内容を聞いてみたい。
・生徒と先生のそれぞれの意欲・意思の統一
・教養教育の一元化をした意味はあったのか、クォーター制にすることでどのような利点があるのか。
・グローバル社会に適応する為に必要となる教育とは何か（を個人的に知りたいので実践して欲しいです）
・大学はどのようにあるべきか
・本学（富山大学）の教育内容あるいは教育改革が他大学に大きく遅れをとっている理由は何か？

結びに代えて

過去３年間継続した「富山大学モデル」（＝実際に開講中の授業の圧縮版を公開し、その後、受講した学生を交えてグループ討議、全体討議へと進む形式）に一区切りを付け、今年度はそれ以前の基調講演と組み合わせる形式に戻したわけですが、結果的に、例年より多くの参加者を集めることができました。テーマを「厳格な成績評価」としたこともあってかグループ討議に職員・学生の参加も目立ちました。

「富山大学モデル」は、本学の全学ＦＤが追究している３つの特徴、すなわち、討議型ＦＤ・全構成員型ＦＤ・楽しむＦＤを具現化する形の一つとして、昨年度までの参加者から概ね好評だったのですが、実際にやろうとすると様々な難点が立ちはだかり、今年度はいったん中断しました。次年度以降どうするかはさらに検討を重ねたいと考えています。

準備を進める過程で、全学ＦＤ・教育評価専門会議の構成メンバーから、学外にも積極的に公開してはどうかという提案がなされ、審議の上で、その方向で開催したことも今年の特徴の一つです。３年前には公開授業部分のみ例外的な参観者がありましたが、今年度は、大学関係者がよく閲覧するメーリングリスト情報や大学の公式ＨＰ等を通じて積極的に広報した結果、短い広報期間であったにもかかわらず、県外からの参加者や高校教員の参加者もあるなど一定の成果を出しました。大学としての社会的説明責任という観点からも、今後はこの方針は継続したいと考えています。

尚、学務部の多くの職員の方々には企画・準備段階から、当日の運営その他で今年度も大変お世話になりました。深く感謝いたします。本学の全学ＦＤは、伝統的にＳＤという側面も兼ね備えており、今後も連携というより一体化して開催し続けたいと考えていますので、宜しくお願い申し上げます。

教育推進センター　副センター長
橋　本　　勝

［付記］

例年通り、全学ＦＤとは別に、約半月後の 11 月 17 日（土）に、学生参画型ＦＤイベント（＝第８回ＵＤ　Talk）も開催し約６０名の学生・教員・職員・一般市民・他大学の教職員が参加して大学教育に関する活発な意見交換を行いました。今年度は、山梨大学から教員・学生がまとまって参加するなど全国的にも知名度が高まっている印象があっただけではなく、高岡キャンパスからの参加学生も２年ぶりに復活するなど全学的なイベントとして定着しつつある感覚もあります。学生ならではのテーマ設定（何かしたいけど何をしていいかわからないあなたへ～学生生活のアップデート～）、ポスター、運営などすべてに学生色が強く出ていますが、教員・職員も各グループに一人以上配置できるほど参加してくれました。全学ＦＤと連携しながら今後も実のあるイベントに成長してくれることを期待しています。

全学ＦＤ２０１８
他教員・職員・学生が納得する評価の在り方を模索する
報告書
発行／２０１９年３月
編集・発行／富山大学教育・学生支援機構教育推進センター
富山市五福３１９０番地